

あります。明治以來六十年の試練を経て最早や牛にも馬にも蹴られぬ様になつた。あほろげ乍ら意識して居た日本の使命、即ち宗教家をして云はしむれば「人類の救ひ」實際的には「アジア民族の開放」「人種平等論の實現」の達成を計る時期に到來せるものではないかと思ひます。

印度問題と日英の關係

一 日英印の三角關係

印度が近き將來に於て獨立するか、即ち自主政府が樹立されるや否やの問題は常に印度三億五千萬の民衆に取りて重大なる問題であるのみならず、英國に取りても浮沈の岐るゝ大問題である。同時に日本の將來に取りても頗る重大なる問題ではあるまいか。なぜかならば、日本の經濟的國外進出は一に東洋に於ける英國勢力の後退、讓歩によりて達成される關係にあると思はれるからである。

英國が印度を放せば、亞細亞からの總撤退を餘儀なくされるは勿論、その全植民地を失ふ結果となるかも知れぬ。此の故に英國は印度を維持するに如何に苦心しつゝあるかは想像に餘りあるものがある。

英國の印度統治を脅かすものは、云ふまでもなく日本であらう。それが政治的軍事的關係に於てあるかの如く言ふのは、爲めにする處あつての喧傳に過ぎない。其關係に於てならば、ロシアとか米人がモット具體的に働いてゐると思ふ。ロシアが國境を越えて如何に印度下層民衆に働きかけて來たかは想像するに難くない。米人は個人的かも知れぬが印度人の獨立運動に多大の同情をよせ、紐育には之を後援する幾つかの協會や團體も出來てゐる。三千人餘の米人が宣教師として印度奥地に入り込み、桎梏の土民を救はんとして献身的の奮闘を繼げて居る。日本人の印度に在留するものは僅に五六百人、而かもそれは主として綿花や屑鐵の買付をする印度に取りては大切な御客である。偶に印度を訪れる日本人は商人を除いては佛跡を探る僧侶位のものである。印度の獨立運動を刺戟するが如き政治的意味合で印度に渡る日本人は絶無であらう、にも不拘英印官憲は日本人と云へば無暗に警戒する。一寸した人には探偵を尾行さして嚴重にその行動を監視する。その神經過敏さは想像に餘りあるものがある。又

印度に於ては日本は事毎に逆宣傳される。支那との問題、滿洲事變など起るに毎、日本は世界一の侵略國で、血に餓えた群狼の如き國民だと惡喧傳される。印度が若し英國の治下を離れたら、群狼日本の爲めに何をされるか分らぬと云ふ。而かも土民は眞面目に夫れを信ずる程に有效に喧傳されてゐる。又一部の印度人インテリ階級は、日本は再び英國の番犬となりて、排英事變でも起きれば、日本は印度に出兵するであらうと考へてゐる。何れにせよ、日本は英國からも印度土民からも極度に警戒されてゐることは事實らしく思はれる。

日本は印度の動向に對し、最も無認識・無關心な國民の一つであらう。「印度人は狡猾不信な人種で互に喧嘩ばかりしてゐる、英國の統治の爲め全く奴隸根性になり腐つてゐる、逆も英國を向ふに廻して獨立など出来る國民ではない」と云ふのは、恐らく日本人の常識となつてゐると思はれる。斯くの如く現今に於ても、日本人印度人互に認識を缺き、政治的意味合に於ては、日本は印度の獨立を刺戟する處か、却つて少な

からず之を掣肘する役目を勤めて居ると思はれる。にも不拘英國は「印度統治を脅かす者は日本也」と観るのは、東洋に於ける経済的實勢力が、日英間に「喰ふか喰はれるか」の關係を餘儀なくしたからだと思ふ。

昨年中頃、インド・タイムスは左記の數字を掲げて「日英戦争避け得るか？」と、大聲叱呼する記事を見た。

對印度日英綿布輸出比較

年度(七月より翌年六月迄)	英國百分率	日本百分率	他國
一九二三—二四年	九七・二%	〇・三%	二・六%
一九二三—二四年	七三・二	一八・四	六・四
一九二九—三〇年	六三・〇	二九・三	五・七
一九三〇—三一年	六八・八	二六・一	五・一
一九三一—三二年	四九・四	四三・八	六・八
一九三二—三三年	四七・七	四七・三	三・〇
一九三三—三四年	五三・五	四三・九	二・六

英國は商賣人の國である。印度を統治して居るのも一言にして云へば、商賣をして金儲けする爲めだとも云へよう。綿布はその代表的の商品である。他國商品の侵入は兵隊の侵入以上に重大視するであらう、又重大視するのは本筋であらう。故に日本商品の印度侵入を政治的に阻止出来ぬ場合は、武力の沙汰に及ぶであらうと観るのは必ずしも驕激な考へ方でもあるまい。

日本商品に對する大顧客たりし米國や支那に對する輸出は逐年遞減するに反し、印度や蘭印に對する輸出は年々増加する。

日本品輸出高(單位百萬圓)

年次	北米	支那	印度	蘭印
一九二三年	六〇三・九	二五三・二	九六・六	四〇・六
一九三二年	四四三・一	二二九・五	一三三・五	一〇〇・二
一九三三年	四四三・三	二〇八・二	二〇三・一	一三七・五

斯くの如き現象は、偶然の事情によるものと観るは淺見であらう。矢張り世界の經

濟的大勢の然らしむる宿命的の現はれであらう。策略的掣肘さへ加へられなければ、早晚印度は日本品の需要國として第一位を占むるに至るであらうと思はれる。

二 國家の存亡を決定する實在

日本近來の經濟的海外進出即ち輸出貿易の伸展を以て積極的な儲仕事と見做し、それが爲めに他國から反感を買ひ、外交的不安を馴致してまでも、その持續乃至伸展を計る必要はないと云ふ熱心な國際協調主義者もあるようであるが、之に關して見逃してはならぬ重大な事實がある。と云ふのは日本の經濟的海外躍進の理由として、爲替安、産業合理化等をあげられてゐるが、それは近因乃至表面の理由で、根本は實に避けがたき日本の國情の然らしむるものであると思はれる。即ち

(一)日本は漸次高度の工業國化されつゝあること即ち農業時代より工業時代に入り輸入國から輸出國に轉換しつゝあること。國費の大部分は商工業者によつて支辨

されるようになるであらう。

更にその根源をたゞせば

(二)限りある國內資源は最早最高度に利用された段階に入り、換言すれば自然資源涸渴の状態となり、而かも人口が年々百萬近く殖える事。即ち人口増加と國民生活の自然向上とのために必要なる生活資料の年々の増加量は、延べて計算して現在に於て約四萬人分で(年々の生活向上率假りに百分の三、三とすれば九千萬の生活資料の増加は約三百萬人分に等し)年々それだけ他人の賃仕事(輸出貿易)が殖えねばならぬことになる。

日本の人口増加を阻止し得る人もないであらう。又國民生活の自然向上が三、四十年毎にその標準が約二倍になることを否定することも出來まい。同時に是等の國民膨脹を賄ふに充分なる土地や自然資源が國內に在ると觀する譯にも行かないであらう。斯く觀じ來れば、都合四百萬人分の而かもそれが年々幾何級數的に増加する國民の食ひ

扶持を何處に求む可きかの問題となる。従前はイザ知らず、少くとも今後は、勞働を他國に賣る賃仕事即ち主として輸出貿易の伸展に俟たねばならぬものであらう。

後進産業國は初めは外資を借入れ、或は物資の形に於て輸入超過を續けるが、或る期間を経過すれば、漸次反對の現象を呈し、海外投資もやれば輸出國にもなる。獨逸は一九〇〇年頃迄は借金國でもあり又大輸入國でもあつたが、漸次輸出國に轉換し、歐洲大戰の直前に於てはその輸出貿易は將に英國を凌駕せんとした。米國も亦歐洲大戰前までは、世界の一大投資地且つ輸入國であつたが、戦後急激に一大輸出國に轉換したのである。輸入國から輸出國への轉換は固より國家國民の膨脹の結果ではあるが、一國の運命としては頗る危機を孕む時期であるとも云へよう。

往年獨逸は政治的に英國からその輸出貿易の伸展を阻まれた爲に、自ら無理な戦争を買つて出て國民は斯くの如き悲惨な目に遇つた。米國も戦後その旺盛な輸出貿易の持續が出来ぬ事情に立到つた爲めに、現在内部的に經濟機構改變の必要に迫られ、漸

次準共產國の傾向を帯び、ルーズベルトは米國最後の大統領であるだらうなど、不吉な懸念までされて居る。

日本なども此の重大な轉換期に於てその自然的な國外膨脹が無理に列強から抑壓されれば、往年の獨逸の如く外に向つて爆發するか或は内部的に自壞作用を起すか、二者孰れかのコースを採るべく餘儀なくされるであらう。

日本の國情に於ては此の轉換期は婦人の分娩にも喩ふ可き重大事であらう。即ち日本は數十年の懷妊期を経て今や分娩を始めたやうなものである。列國が政治的に日本の國際的膨脹を阻止することは、分娩の生理作用を阻止すると同様の結果を齎すであらう。

斯く考ふる時に、現在直面しつゝある日本の「非常時」は誠に容易ならぬ「非常時」で軍縮問題にかゝはるが如き抽象的なものばかりでなく、その下層には國家の存亡を決定する現實な重大問題が實在すると思はれるのである。

三 避けがたき人口壓力の爆發

此の兩三年共産主義者中轉向する者が多くなり、又左傾する青年も著しく少なくなつたと思はれる。邦家の爲め誠に結構な事だと思ふ。然れども之を當局の取締が嚴重になつた爲めだとのみ観るのは淺見であらう。矢張り事業界が稍々好轉し、學校を卒業すれば大部分は直ぐ就職出来るような状態になつたからではあるまいか。

左傾思想の浸潤は少數の若いインテリ階級の遊戯であるかの如く之を輕視することは出来まい。彼等は實行に移す力はなくとも、社會運動に對し何等かの刺戟を與へる。従つて形を換えた社會改革を醸成せしむる可能性を多分に持つ。血盟團事件、五一五事件其他近頃の愛國運動はその目的とする處は正反對でも、一時青年學徒間に瀾漫せる赤化思想と何等かの因果關係なしとは何人が斷言出来よう。過般問題になつた陸軍パンフレットの如きも、其の述ぶる處は世間を憚りてか不徹底ではあるが、その

究局に於て目指す處は、經濟機構の根本的改變ではあるまいか。即ち細民の子弟を後顧の憂なく國防の爲めに動員するには、銃後の經濟機構が現在の儘では困る。國家の恩恵を最も多く利用して富を作る資本家は、直接國家に身命を捧げる細民にもその富を頒けてやる組織にし度いと云ふ處に、眞意があるのではあるまいか。

斯くの如く國內に色々な問題が起るのも、要は國民の衣食充分ならず若年の後進者の進路が塞がれる爲めであらう。換言すれば前述の約四百萬人分の生活資料を年々追加して國外から稼ぎ取る段取が立たぬ時に起る現象であらう。資本家は此の段取を立てる時にその富の集積は正當附けられ、又國家の爲めになると思ふ。

國內に天然資源が乏しい點に於て日本と略國情を同する伊太利では、年々七、八十萬の移民を南北米に送ることによりて、國民膨脹のハケ口が出来てゐる。移民を送る場所がない日本の國民膨脹のハケ口は、商品又は企業形の形に於て爲さるゝ經濟的國外進出即ち主として輸出貿易の伸展以外に道が無いことは明白ではあるまいか。日本

の輸出貿易の伸展には必然的に原料の輸入が伴ふ。即ち原料輸出國の産業を潤す。従つて世界の産業繁榮に貢献することは云ふまでもないことであらう。

數百年の昔から西歐の先進國は、通商の自由を世界の原則とし、東洋各地の植民地を占據したのもその原則の確立の爲めだと稱してゐた。即ち「自由競争により良い品を生産し之を世界に賣出すことは、人類文化を促進する所以である。之を阻止するものは人類の進歩向上を妨ぐるものである」と云ふ建前から、通商の自由を妨ぐるものがあれば、之を世界文明の公敵として大砲まで打つて、通商自由主義を東洋諸國に強制した。日本などは此の原則をモットーとして永年拮据勉勵して、産業改良に精進し、最近やうやく彼等と競争して負けぬようになった。處が彼等は態度を一變して「廉價良質の製品を他國に賣込むことは、相手國の産業を破壊し、失業群を作り、社會不安を増す。即ち世界の平和人道を阻害する」と云う理窟から所謂産業平和論を振廻はし、世界の貿易状態を従前の儘に保つことを以て國際道德の規準であるかの如く主張し、

輸入割當制、バーター制通商政策等を臆面もなく實施するに至つた。彼等は實力の競争に落伍せるを自覺し、門戸を閉して國內に退嬰し、本國の需要丈けを自國産業で賄ひ度いと云ふのならば、之に同情すべき理由もあらうが、事情を全く異にする東洋の植民地に於て、而かもそれは通商自由主義確立の必要上占據したと稱する東洋他民族の國土に於て、且つその被統治民族の負擔に於て、土民の渴望する安い日本品の自由取引を禁ずると云ふことは、根本に於て筋の通らぬ仕打なるのみならず、彼等の口實として新に唱ふる産業平和論そのもの、趣旨にも相反する所爲である。通商自由主義を打切りにするのならば、同時に彼等の東洋植民地からも手を退くのは本筋ではあるまいか。斯くの如きは常に彼等の理論的矛盾の暴露であるのみならず、赤貧洗ふが如き土民に無理に自國の高い品を押賣する爲めに、安い日本品の輸入を政治的に防遏する政策は、現實に東洋民族の經濟的共倒れを強ふるものではあるまいか、此の關係に於て代表的な被統治國は印度である。此の意味に於て、印度に自主政府が許され萬事

その住民の利害のみを基準とする政策が行はれるようになるか否かは、前述せる現在日本がやりかけた分娩を果し得るや否やの問題に懸ると思ふ。

四 印度は獨立するか？

印度の獨立は近き將來に於てその可能性ありや否やの問題に就き、政治的觀點よりする豫測はスベキレイション以外の何物でもないであらう。明日にも獨立する秘密の計畫があるかも知れぬ。結局誰にも分らぬ問題であらう。然れども

(一)英國官憲の取締り巧妙なる爲め印度内部の民情が外部には餘り分らぬようにされて居ること。印度に關する書籍の多くは英國の代辨的著述であらう。カザリン・メイヤーと云ふ米國の女新聞記者が數年前マザア・インデアと云ふ本を書いた。米國では二百萬部も賣れたそうだが、内容は吾々の見聞と著しく違ふ處がある。聞けば同記者は英國の政府から雇はれて印度を二、三箇月視察して書いたも

のであると云ふ。印度人獨立運動者中にも英政府から雇はれ、そのスパイを勤めて居るものも大分あると云ふ。

(二)印度三億五千萬の人口中、二億の印度教徒と七千萬の回教徒と事毎に反目すること。然れども彼等は種族が違ふ譯ではなく、單に宗教を異にするだけである故獨立と云ふ問題には兩者が一致する。由來英政府は少數の回教徒を殊更に可愛がる政策を採りたることも、兩者の軋轢を激化せしめる原因であつたらう。印度人識者は、兩者の反目は英政府の策動によるとも云ふ。

(三)印度土民の八、九割は文盲で、概して自覺足らず、英國の統治にも獨立の問題にも無關心であること。自治の能力有無に關しては、英人は無しと云ひ印度人は有ると云ふ。やらせて見ねば分らぬ問題であらう。然し印度人智識階級には印度に來て居る英人などは足許にも寄せ附けぬ優れた頭の持主は澤山居ると思はれる。立法院の討論などに於ては英人が印度人議員にやり込められるのは普通だと

云ふ。土民大衆の大部分が冬眠状態に在ることは、英國の統治には好都合な條件であるが、同時に獨立の妨げにもならぬ。

(四)非合法的直接行動により印度人が英人を排撃し獨立を計ることは不可能と思はるゝこと。印度駐在の英國軍隊は約七萬人、土民兵は約十五萬人に過ぎぬ、而かも訓練後は武器を取上げ倉庫に入れて鍵をすると云ふ嚴重な警戒振りである。一般民衆は固より武器らしきものは一切持たせられぬ。英國の土民取締は徹底して居る。命に反して集合せる民衆は遠慮なく機關銃で射殺される。印度民衆は之を冒してまでも反英運動を試みる氣力が無い。

(五)ガンヂーの不服従運動は、その形態に於ては完全に失敗に終りたること。最近ガンヂー自身も直接運動にはたづさわらぬことを聲明して居る。現總督ウイリントン卿の向ふ見ずの彈壓政策は效を奏したとも云へよう。然れども英國は歐洲大戰後本當に印度に自治政府を許す積りで一時取締りの手を緩めた。ガンヂーの獨

立運動が一時成功するかに見えたのもその爲めであつたかも知れぬが、此の期間に全印度に擴大せる反英獨立の思想、殊に少壯印度人間に浸潤せる此の思想は、如何なる彈壓を以てしても之を掃蕩することは困難であらう。寧ろ眠れる大衆に瀰漫する一方であらう。

(六)最近無産インテリ階級間に赤化思想が可なり根強く浸潤せること。今の處獨立派と合流の傾向はないが、ロシアの策動の如何により、將來二者合流の可能性は多分にある。「印度の獨立は世界に、も一つソヴエットを作る事だ」と觀る向きもあるが、印度人の傳統的思想殊に固有の文化を誇りとする印度に於ては、此の觀察は當らないと思はれる。然れども英國の政策宜しきを得ざれば、赤化は獨立の手段となる可能性はある。印度に獨立のチャンスありとせば、寧ろ此の方角からではあるまいか。

以上は甚だ抽象的ながら、恐らく大した見當違ひのない觀方であると思はれる。

之を要するに、政治的に觀た現在の印度は「監視人に抵抗して脱走せんとする氣力も自由も持たぬが、監視人の見張りに隙さへ出来れば脱兎の如く逃げ出さんとして狙つて居る囚人」の如きものであらう。

英國は一九一九年その印度に對する政策を聲明して「漸次印度人を政治に参加せしめて、安心の出来る責任ある自治政府」を樹立すべく努めて居るものと思はれる。英國の印度に對する利害はローザメーヤ卿の推算によると十億磅の投資に相當すると云ふ。此の投資が安全に保護され又は回收出来る見透しのつかぬ間は、直に印度人の要望するが如き「完全なる獨立」を許す譯にも行かぬであらう。然れども問題は、近來の經濟上の情勢は、英國は如何なる統治を以てするも、印度からの利益の回收は困難に陥りつゝあることである。追々には英國が印度を統治する爲めに損をせねばならぬことになるであらう。

之が英國識者の深憂する「英國の悩み」であると思はれる。

五 英印間の政治取引

歐洲大戰當時、英國は印度に對し重大なる約束手形を振出して居る。即ち印度に濠洲カナダ同様の自主政治を許すと約束したことである。その約手により、當時英國は印度の反英獨立を未然に防ぎ、剩へ百數十萬の印度兵を歐洲の戦場に使役し、幾十億留比かの戦費を印度土民に負擔せしむるを得たとも云へよう。尤もそう云ふことの出来たのも、日本と云ふ忠實な番犬が控えて居た爲めであつたことは云ふまでもあるまい。その手形は戦後幾度か書換ええられ、其の都度骨抜きにはされたが、英國は何等かの形式に於てその決濟を付けねばならぬ筋合にあつた譯である。昨年十一月英國議會に上程された新印度憲法案は即ちその手形の決濟の積りであらう。

同意法案は、最初一九三三年三月政府案として議會に提出され、それが上下兩院三十一名より成る特別審査委員附托となり一年半餘の審査を経て、その修正案が昨年十

一月二十一日英國議會開會と同時に上程されたものである。全部で三百頁餘に亘る頗る浩瀚な法案で、マクドナルド首相の説明通り「英國議會に於ける歴史的の重大なる一大法案」であり、又新聞紙の傳ふる通り「英國政治家が智慧の有る丈けを搾つて作り上げた未曾有の大法案」であらう。

英國現政府は此の法案を基礎として印度憲法を制定するであらうことは、略々確定的のものであらうが、小數の極右保守派は之を以て「印度放棄の第一歩なり」と憤慨し、又反對に一部の識者は「印度統治の安定は印度人をして英國に信頼せしむる以外に道なし。今や相當に覺醒せる印度に對し、斯かる朝三暮四の誤魔化し政策を繰返すことは、英國政治家の不信を暴露するものなり」と論難するものも、少くないようである。

議會に於ては「往年約束せる自主政治の許容が尙早ならば、此回の改革案は或る期間の漸定的制度なることを憲法に明記す可し」と云ふ具體的修正案も、出て居る様である。

ある。

一般に英國人は今回の新憲法案を以て「印度の勝利」視して居るが、昨年十一月その内容が印度に傳はるや、印度には不満反對のコーラスが起きたと傳へられて居る。爾來印度の各新聞は、連日之に對する批判論難の記事を満載して「印度政治の逆轉」を連呼して居ると報ぜられる。恐らく印度議會に於ては、同改革案は否決されるであらう。

同改革案の沿革及び内容に關しては、三月號の「外交時報」に寄せた拙稿に於て稍々詳しく述べてあり、又之に關して詳述することは本稿の目的でもないから之を略するが、その骨子とする處は、一九三〇年の印度統治に關するサイモン報告書を基礎とし、之に保守的修正を加へたものである。即ち

(一)英領印度と印度王領とを合併し全印度聯邦を組織する。但し各王領の聯邦加入はその自由意志による。

- (一) ビルマを印度より分離し別個の英領とする。
- (二) 従來の英領印度中十一州には代議制自治政治を施行する。
- (三) 州總督は治安維持に關し特別の權限を有す。
- (四) 聯邦總督は従前通り聯邦議會の決議を否認する權限を有し、外交、軍事、鐵道の事務を直轄す。
- (五) 聯邦に統一される王領の内政に關しては従前通り聯邦政府之に干渉せず。

之が歐洲大戰當時印度に與へた約束手形の決濟であるとするれば餘りに印度を踏み倒した支拂方法であらうが、英國側にも痛し痒しの悩みがある。印度が若しカナダ、濠洲同様の同民族の植民地であつたならば、手形の不渡もやるまいし、又やらせてもあくまい。恐らく遠うの昔に印度は英帝國の一部として自由なる自主政治國になつて居たであらうが、そこには所謂生さぬ仲の悩みがある。印度に若し完全な自主政治を許

したなら、十億磅と推算される英國の權益がどうされるか分らぬと云ふ疑心暗鬼が生ずる。

然し植民地は矢張り、民族の問題とは無關係に、林檎の如きもので成熟すれば、母樹から離れることは所詮避け難き宿命であらう。寧ろ近代の經濟的大勢よりすれば、植民地は胎兒の如きものであるまいか、一定の期間に胎兒が發育すれば、母體自身の安全を計る爲めに厭應なしに之を生み落さねばならぬものであらう。故に印度の問題に關しては流石老練な英國政治家達も悩み抜いて居る形跡が窺はれる。

六 印度聯邦建設とビルマの分離

戰時發行の英國の印度に對する約手は別として、今回の印度統治改革案は、その額面を以て評價すれば、實質に於て現在と大差ないにせよ、儘に印度に對する英國の讓歩を具體化せるものであり「印度の勝利」とも云へようが、轉んでも唯は起きぬ英國

政治家の頭腦は、名を捨て、實を採る工夫に長けて居ることが觀取出來る。同時に英國の植民政策は金儲け以外の何物でもないことも明かに窺はれる。

ビルマを印度から切り放すことは、人種の相違、即ち印度人は西洋人に似た骨相のアリアン族で、ビルマ人は支那人日本人に似たモンゴリア系の人種であると云ふ表面的の理由ばかりではあるまい。ビルマは周知の如く印度の倉庫であり、臺所である。印度で消費される米、木材、石油はビルマから多量に供給されて居る。殊にビルマから印度に輸入される米は年々二百萬噸以上に及び、此の米の供給が杜絶した丈けでも、印度の食料問題に重大事態を起すであらう。ビルマを印度から分離して全然別個の英領とすれば、萬一の場合印度を兵糧攻めにすることも出来る。又實際問題としてビルマから移出される印度の必需品に對し輸出税を課すれば、手を換えた印度搾取の方法ともなるであらう。

更に根本的な問題は、近來印度國內の工業化と共に、英國の品物は餘り賣れず、又原料品の輸出も思はしからず、昔日旺盛なりしその輸出超過も著しく遞減しつゝある。之に反してビルマは依然農業國原料國として幕大な輸出超過を續けて居る。植民地からの搾取は原則としてその輸出超過額を以て限度とする。輸出超過のない植民地の統治は年々その統治費丈け本國から持出すか、或は土民の生活をそれ丈け低下せしめて之を賄はねばならぬ。故に輸出超過の少ない植民地は政治的意味を除いては之を統治することは餘り算盤に合はぬ。此點から觀て、英國は餘りうま味の残らぬ印度と處女林の如きビルマとを共同計算の許に統治することの不利なるは極めて明白なことである。今回の改革案から觀れば、英國はビルマを印度から分離してその支配下に確保すれば、印度は何時放棄してもよいといふ肚を極めて居るかにも想像される。是れ英國政治家の遠謀深慮而かも打算に明敏なるを示すものであらう。然れども、半獨立國の印度各王領を全印度聯邦に合併統一せんとする政策は、英國に於ても有力識者の反對意見が續出して居るようであるが、前述のビルマ分離の遠謀深慮に全く似寄りも

つかぬ近視淺慮の計畫であるまいかと思はれる。當に爐中燒栗を手掴みせんとするものであらう。

印度は對外的には、英國統治下の一帝國の外觀を備へて居るが、本當の英領印度と稱するものは印度全面積の五分の三に過ぎぬ。他の五分の二の面積と七千萬餘の人口は、大小六百餘の王領に區分され、各々英國との條約により、對外問題を除いては全く自主自由の王國であつた譯である。新憲法によれば、その内政には干渉せぬと云ふ條件附ではあるが、是等の王領は聯邦政府に統轄され、その支配下におかれることになる。

古來世界の覇者を志す者が、等しく美望の的とせる富裕文化の印度を、英國は自ら餘り勞せずして一世紀以上も之を統治し、その富を根こそぎ搾取するを得た根本の理由はその傳統的政策たる「分割して支配せよ」を忠實に遵奉した爲めであるとも云へよう。

從來印度人王領は勿論英領印度各州も、又種族的にも階級的にも宗教的にも、英國との政治的關係は實に千差萬別、殆んど悉く相異なる立場におかれた。此の方針は、公式の總督教書にも歴然と明記されたる土民統治の根本政策で、印度に於ては理想的に其の功を奏し、印度人相互は常習的に反目軋轢を續けて來た。故に此の政策は英國の印度統治に於ける唯一の武器であつたとも云へよう。殊に英國は、印度沿岸地方の通商上重要な地點は英領印度として自ら之を統治し、奥地高原等は王族の統治に一任し、多數の王族を位階勳等を以て釣り、或は「殿下」に祀り上げ、うまく彼等を懐柔して英國統治を謳歌せしめ、巧妙に直轄諸州を牽制して來たと觀られるが、今回の改革案は、此の傳統的分割統治主義を一掃し、全印度を統一して一大聯邦を組織せんとするものである。

是れ、即ち一部英國識者の深憂する點にして、事實之が爲めに英國は印度統治に關し、自ら墓穴を掘る結果となりはしまいかと思はれる。

七 革命派の印度議會占據

前述の如く印度王族の聯邦加入はその自由意志によると云ふ建て前だから、各王族が果して新憲法による印度聯邦加入を應諾するや、否や、頗る興味ある問題であるが去る一月下旬印度に開かれた王族會議に於ては、各王族は或る條件附で聯邦加入の用意ありと決議して居る。その條件と云ふのは、彼等自身の特權の保證と、聯邦の自主政治に對する保證であらうと想像される。

一方英本國に於ても、王領の聯邦編入に對しては相當有力な反對があるようである。英國上院の老政治家十數名が連名して有力な印度王族に聯邦不参加の勸告狀を出したことも新聞に見えて居る。又東洋問題に關しては最も見透しが正確だと云はれて居る新聞王ローザメーヤ子爵が、去る一月二十一日多數の印度王族に宛て左の意味の打電をした。爲めに英國及印度に於ては可なりのセンセイションを起して居ると

云ふ。曰く

『近ク印度統治改革案審議サル、ニ鑑ミ、印度ニ於ケル英國官憲ハ或ハ威シ或ハ甘言ヲ以テ王族ヲ籠絡シ、同改革案ニ同意セシム可ク必死ノ努力ヲ試ミツ、アリ。然レドモ同改革案ハ實ニ驚ク可キ實質ノモノニテ王族ハ大ニ之ヲ恐レザル可カラザルモノナリ。若シ之ニ同意スルガ如キコトアラバ、自ラ自滅ヲ招ク結果トナルベシ。新印度聯邦建設サレタナラバ、今後ノ印度政權ヲ握ル汎印度獨立黨急進派ノ爲メニ、三年以内多分三箇月以内ニ、王族ノ地位ト特權ハ剝奪サレルデアロウ。ソレハ殆ンド間違ナキ成リ行也。各王族ハ今ヤ自己ノ立場ト印度トヲ救フ爲メニ、善處セザル可カラザル重大時機ニ直面セリ。唯王族ハ英國政府ノ提案ヲ拒否スルコトニ於テノミ、印度ニ於ケル英國統治ヲ救フ最後ノ危険信號ヲ掲グル役トナル可シ。』
斯くの如き情勢にて、全印度聯邦結成迄には相當の紆餘曲折は免れざるものと思はれるが、若し代議制聯邦政府が樹立されたならば、印度政權は案外短期間に、ローザ

メーヤ卿の言葉の如く、革命派の手に握られる可能性が多分にありはしないかと思はれる。

英國を代表する印度總督は「聯邦議會の決議を否認する特權あり」など、云ふ。英國の爲めの安全保證は、英人によつて政治教育された印度に於て、果して永久に安全保證となるや否や甚だ疑はしいものがあると思ふ。

印度の國民議會を中心とするガンデー一派の排英派は、從來英人の組織した印度議會をボイコットして議員も餘り出さなかつたが、近年有らゆる反英運動を封ぜられ、他に方法がなくなつた彼等は、昨年十一月の議員改選に際し、積極的に議會占據を企て四十三の議席を獲得した。百四十五の議席中、官選四十一名、民選白人八名、都合約五十名の白人議員以外には純粹な英國支持者がないとも見られる。其他の印度人議員は、英國が如何に懐柔籠落に努むるとも、印度對英國の利害の衝突に於ては、急進反英派に合流するものと思はねばなるまい。印度に於ける英國官憲は、急進反英派に

印度議會を左右さるゝ恐なしとたか括つて居たらしい。然るに一月三十日印度發電によれば「一月十日ロンドンに於て調印された英印新通商協定は、一月三十日印度議會の表決に附せられたが、意外にも六十六票對五十八票で否決された云々」とある。

印度總督は勿論之に關し、その議會決議否認權を行使するであらうが、責任政治を高唱する英國が、自ら組織せる代議制を否定する右の如き事例を頻發せしむることは印度統治に對する英國の不信を具體化し、自ら印度民衆に、英國の搾取政策を暴露廣告することとなり、從つて自ら印度に於ける反英思想の擴大に油を注ぐ結果となるであらう。

新憲法により聯邦議會が組織されば、此點に於ける英國の立場は一層危險に陥ることになるであらう。斯く考ふれば「新憲法案は英國が印度を放棄する第一歩なり」と云ふは、必ずしも一部英國保守派の杞憂ばかりでないかも知れぬ。

實明なる英國政治家は、何故に從來の分割統治主義を捨て、反對に全印度を結束統

一する聯邦組織を選んだかを考ふるに、要するに全印度の通商輸入の統制を計らんが爲めであらう。前述の如く印度面積の五分の二を占むる半獨立王領は、全印度に跨りて散在し、原則として關稅自主を許されて居る。彼等の王領向輸入品は保稅貨として輸入港から鐵道で輸送される。英領印度の高率關稅輸入制限が嚴しく行はるゝに連れて、是等王領向輸入が激増したと傳へられる。殊に日本品の王領向輸入が頓に増加したと想像される。日印通商協定が昨年から實施された爲め、本來なら日本品の印度向輸出は二割方減退するだらうと豫想された。然るに事實は、一昨年の印度向輸出額約一億八千萬圓に對し昨年は約二億一千萬圓と云ふ數字を示す。之を以て觀ても英國が聯邦組織統制の許に印度王領の關稅取締りの必要を痛感したのであらうことは想像するに難くない。

然れども、他國品の印度侵入防遏策を強化せんが爲めに、全印度を統一する聯邦組織を企劃するならば、英國識者の深憂する通り、それは餘りに打算に急なる近視淺慮の策であらう。なぜかならば、統一された全印度の結束は直に英國に對抗する力となつて現はれることは、最近の印度情勢に於て避け難き成り行であらう。

八 貧者必勝の原理

以上は主として政治的方面から觀た印度の自主政治又は獨立の可能性に關する情勢であるが、先に斷つた通り、政治的觀點よりする是等の問題に關する檢討は、結局抽象的となり、雲を掴むような話に終る。又他國の領土に關し妄りに是等の問題を云謂することは、意外な誤解を招く虞がある。成る可く之を差控へることにしたい。

要するに前述の如き政治的情勢として表面化するものも、畢竟その基礎構造即ち經濟的實在の上に建てられたる上屋に過ぎぬものであらう。聖雄ガンヂーの出現も、印度人の悲惨な貧困とその急速な人口増加の然らしめたものだと觀ることが出來よう。幾多の印度青年が、獨立運動のために身命を惜まざる愛國的情熱を抱くのも、彼等同

胞の生活が餘りにも虐げられて居る爲めだとも云へよう。

印度の如き搾取主義植民地（自國民の移住を目的とせざる）に於ては、統治するものと統治される者との生活標準が、漸次かけ離れて行くことは必然的である。搾取が緩和されざる間は、兩者生活標準の比較が幾何級數的に擴大されて行くことも見易い道理である。而かも低度文化の被統治民族は、その高度文化の統治民族との接觸により兩者生活様式の接近を促される。従つて被統治民族の貧困はより苦痛に感ぜられ、その生活低下はより悲惨に感ぜられる。要するに、英國人と印度人との生活標準は、金持ちと貧乏人との差ではなく、王様と奴隸の差となり、更に加速度的に人間と動物の差になるであらう。「英國の印度開發の結果、印度土民は如何に西歐文化の福祉に浴して居るか分らぬ」と云ふことも出来やうが、然し印度民族も地球上に存在する以上は地球と共に自轉公轉する。地球上の森羅萬象は平衡を目ざして進化する際、獨り印度民族が此原則に逆行することを強いらるゝことは、要するに人間から動物に轉落を強

いらるゝ如きものであらう。

斯くの如き状態が統治者の政治的優勢により無限に繼續されるものとすれば、天の攝理は餘りに不公平なものである。然れども幸に其處には學者の所謂「貧者必勝の原理」が行はれると思ふ。

印度に就いて觀るに、現にその原理が作用しつゝありと云ふことが出来よう。即ち英印間の政治的關係は如何なる形勢に於て變遷するかは別として、その基礎構造たる經濟的實在に於て英國が印度を統治することによつて利益せず更に統治を繼續すれば自己の破綻を結果することになるであらう。筆者は昨年此點に關し聊か陳べたことがあるが、一言にして云へば「貧者必勝の原理」により、印度は必ず英國に勝つと觀られる。

根本的な自然界の原則により、文明人が野蠻人に征服されると云ふことは、古來民族興廢の常例である。機械文明の發達せざる時代に於ては、武力闘争の關係に於てそ

うであつたが、人類の經濟活動が盛んになつた現代に於ては、經濟的關係に於てそれが現はれるのが自然であらう。

英國人と印度土民の生活標準が、王様と奴隸程の差があり、假りに英國勞働者の生活費が印度人勞働者の十倍を要するとせば、英國の工業生産は到底印度に太刀打ち出來ぬことを意味する。殊に最近の機械文明の發達は「量的」的に機械應用の範圍が擴まると同時に「質」的に機械作業が單純化される。即ち内容は複雑な機械でも、これを操縱するには單にハンドルを前後すれば済む様に工夫される。單にハンドルを前後する丈の作業ならば、日給十志の英國勞働者も、日給一志の印度人勞働者もその能率に變りがないことになる。従つて利に慧い資本家は印度に工場を建て、印度で消費される品は勿論、英國で消費されるものまでも印度で造らうとするのは自然の成り行である。此の傾向は如何なる政治的手段を以てしても防ぎ得ざるものであらう。是れ即ち印度が近來頓に工業化され、將に英本國を逆襲せんとする形勢を示すに至れる所

以であらう。數字をして之を語らしむれば

印度工業生産品輸出額

一八九二年 一個年	約一億六千萬留比
一九〇七年 同	約四億留比
一九一四年を終とする戰前五個年平均	約五億留比
一九二九年 一個年	約九億留比

印度工場増設の一例

	一九一八年	一九二七年
紡績工場	三九	三〇(投下資本十二割増)
麻工場	共	壹
毛絲工場	六	八

印度工業活動概況(一九二九年末現在)

部 門	工場數	使働職工數 千人
織 維 工 業	五七〇	七六〇
資者必勝の原理		二二三

印度問題と日英の関係

機械工業	七五	二二四
金屬工業	二八	三六七
食料嗜好品工場	二、六八	六〇
化學工業	四九	一八九
製紙工業其他	三九	四六
建築材料工場	四七	四八
織綿工場	二、八三	七二
總計(其他ヲ含ム)	八、五八	一、七三

英印間の經濟關係を示す代表的のものは綿業であらう。寧ろ英國は主として綿業の關係に於て印度統治からの利益を擧げて來たとも云へよう。然るにそれが左の如き實狀を呈して居る。

綿布生産高及移入高

一九一三年	英國	印度	英國より印度に移入量
	約七五億碼	約一一億碼	約三一億碼

一九三一年 約二三億碼 約二八億碼 約四億碼

紡績錠數

一九三〇年	英國	印度
	五、二〇七千臺	八、四〇七千臺
一九三一年	五、二四六	九、二二五
一九三二年	五、九〇八	九、三三三
一九三四年	約四、〇〇〇	約一〇、〇〇〇

【註】日本現在の紡績錠數は印度と略々同様約一千萬臺にして、昨年の綿布海外輸出量は約二十六億碼、英國昨年の綿布輸出量二十萬碼なる點より觀て、英國の錠數四千五百萬臺中大半は遊んで居るものと推定される。

以上の如き趨勢を辿れば、英國の工業生産は漸次印度に奪はれ、更に逆襲を受けることは必然であらう。既に或種の輕工業加工品は印度から英本國に逆輸入され、英國産業を蠶食しつつある。英國の産業は昨年は、爲替安其他の影響を受け、稍々小康を得たが猶その失業者數は三、四年前の二倍を下らぬ。英國は根本の條件として、その

國民の生活標準がその被統治民族に比し著しき懸隔のある間は、換言すれば搾取主義植民地と共通の經濟生活を營む間即ち其處を放棄せざる間は、自國の産業は漸次破壊に導かれるであらう。即ち「貧者必勝の原理」は、政治的工作を超えて作用するであらう。

九 目睫に迫る東洋の變革

前各章に於て陳べた處を要約すれば「日本の國土と資源は、既に十數年前より到底我が人口を支へ切れざる段階に入り、近年の經濟的海外進出は、此の避け難き人口壓力の流出である。之を阻止すれば爆發して對外戦争となるか、然らずんば内訌して國家の自壊を醸成するであらう。即ち戦争か革命か、二つの一つの途を辿る可く必然付けられて居る。阻止された儘、現状維持を擬態することは、日本の國情に鑑み絶對に有り能はざることである。日本の膨脹と對立するものは、米國でもロシアでもない、結

局英國の東洋に於ける既存勢力である。東洋に於ける英國の勢力は既にその存在の能力を失ひ、その繼續は大勢の進行に逆行するものである。此の不自然なる事態の存続は、直接日本と印度との興亡の問題にかゝる。のみならず英國自身も自ら破綻を招く結果ともなる」と云ふ事實の現示する客觀的情勢である。

一言にして云へば、日本はその避け難き膨脹のために、途中で米國とかロシアとか見當違ひの相手と抗争し、自ら脱線せぬ限り、英國との衝突は避け難き運命にある。衝突の結果の悲惨事は測り知る可からざるものがある。此の衝突を如何に避く可きやを工夫することは、日英兩國指導階級の緊急な責任であると思ふ。前回縷述せる事實の示す處、日英衝突を避くるの途は唯一つ、即ち印度の解放以外に方法がないと思はれる。

英國が印度を解放することは如何にも大變な事のやうに見える。英國が印度を放せば、亞白人が亞細亞から總撤退せねばならぬことになるかも知れぬ。斯かる世界大革

命が目睫の間に迫るとは考へ難いかも知れぬ。然れども、それは事態變遷の基礎構造を見逃がし、隋性と政治的綾に惑はされた錯覺であらう。濱邊の打浪は其の場で出来るものではない。何湏か先の沖合から打寄せ来る潮の運動の作用である。打浪が其の場で出来るものならば、人爲的に之を鎮めることも出来やうが、遠く沖合から来るものなるが故に、人間の力で如何んとも致し難い。と同様に、東洋に於ける事態の變遷も、その由因する處遠きに在るが故に、もはや其の炸裂は避けがたきものであらう。

明治維新當時、日本の指導的立場に在つた各藩の家老重役達は、日本に於ては最も有能賢明な人達であり、且つ當時内外の情勢に最も通曉して居た筈である。然し是等の人達には、三百年も無事に續いた徳川の天下に急變ある可しとは到底考へ能はざりしことであつたらう。即ち隋性と變遷の綾に惑はされ、根本の基礎構造の推移を正直に觀るを得なかつたものであらう。此の故に、維新の大業は、當時名もなき田舎の書生や浪人の手によつて達成された。

今や經濟上の實勢は東洋を舞臺とする「世界維新」を必然付けて居る。英國は徳川公將としての存續は許されても、徳川將軍として國際幕府を維持することは出来ない情勢に迫られて居る。日本は薩長の藩侯に當る。その家老重役に當る日本の既成識者間には「百數十年續いたアングロサクソンの天下はそう簡単に瓦解はしまし」と觀る向きが多い。白人國諸藩は殆んど悉く佐幕黨であらうが、眞理と大勢に逆行する彼等の現状維持政策は、日本が自ら道を踏み違へさへしなければ、自ら瓦解退散するものではあるまいか。英國の政治家は賢明にして經驗がある。日本が薩長の如き正義の旗を翻せば英國には慶喜公、勝海舟の如き卓見家が現はれ出で、之に共鳴するであらう。斯くして大した慘事なしに維新は達成せられ、亞細亞被搾取民族は解放されるであらう。彼等はその文化と産業能力に順應した生活を營み、民族間に、如實共存共榮の關係が結ばれるであらう。缺食兒の如き被搾取民族の生活が著しく向上し、従つて世界の消費總和を激増し、世界不況の根本原因たる「消費不足」は一遍に解消するで

あらう。

被統治民族は啓蒙さるゝ利益よりも搾取される損害の大なる時に民族意識が擡頭する。搾取される爲めの生活低下を著しく苦惱する他民族を搾取して、無理にその生活を低下せしむる事により、即ち民族の共存共榮を度外視して、世界の繁榮を期し得る道理がない。英國は搾取統治を強化する爲めに軍艦を作るよりも、搾取統治そのものを放棄することにより、世界全土を投資の対象とする英國金融資本の利廻りはより安定するであらう。

一〇 英國の牒報機關

昨年の今頃は、英國は「日本品は世界産業平和の公敵なり」として、排日貨氣勢の音頭取りに大童になつて居た頃である。五月は、英國は從來國際通商の根本原則なりとして、自ら他國に強制して來た通商自由主義を弊履の如く捨て、何十年か續いた

日本との通商條約も破棄し、日本に熱湯を飲ませが如き、日本品防歴の暴舉に出でた時である。それから未だ一年も経たぬ間に、英國には日英同盟復活論を眞面目に論議する者もある。之を觀て「人の頭を殴つて置いて、仲好くならうもないものだ」と徒に憤慨するにも當るまいが、是等の事例により英國の實體を見極めて置く必要があると思ふ。

英國の對外政策は頗る老獪であると云ふが、斯く見えるのも理由があると思ふ。英國は、日米間の如く感情外交に走るが如きことは絶對になく、利害の打算以外に彼等の神經は微動だにせぬであらう、且つその打算は正確にして細かである。英國人は世界各地に對し、現在約七百億圓の投資をして居る。而かも彼等は昔からの經驗より、投資は成る可く多方面に亘るを以て危険分散の效があると信じる。保險業が特に英國に發達したのも、英國人の危険分散を好む習性によると云はれて居る。假りに十萬圓の資産家でも、濠洲、カナダ、支那、南米等世界各地の事業株に財産を分けて投資す

る。總額七百億圓の投資に對する配當として、年々數十億圓の収益が英國に流れ込む計算になる。英國の資産階級は、此の收入によりて衣食して居るとも云へやう。故に是等の投資事業の營業狀態、即ち世界各地の政治經濟の情勢は、刻々詳細に英本國の出資者に報告される。その迅速にして詳細な報道に基いて、英國對外政策の輿論が生れる。英國の海外在留者は悉くスバイであると云ふが、彼等は商賣上の必要から其地の事情を本國に通報するに過ぎぬものが多からう。日本などは外務省の豫算を全部騰報部に廻しても、到底英國の眞似は出來まいと思ふ。英國は斯くの如き有效適切なる騰報機關を持つが故に、世界の大事勢は手に採るが如くロンドンに反映する。之れ英國の外交は利害の打算に明敏な所以であらう。従つてそれを基礎とする英國外交に、日本や米國が赤兒の如くあしらはれるのも無理からぬことであらう。

斯くの如く英國の外交は、云はゞ商賣人の金儲けの必要上報道せるものを基礎とせる輿論の外交であるが故に、自己の利害には明敏である代り、他人の立場に認識を缺

く場合が少なくない。

又英國は過去百年以上國際幕府として世界に君臨し、多數の後進民族をだまして金儲けを續けて來た關係もあり「英國の利害は世界の道德なり、自己の利の在る處に眞理あり」と云ふ主觀的錯覺に陥る場合なしとは云へない。此の場合英國の輿論を是正する爲めには、遠慮なく之を攻撃することが何よりも必要であらう。英國の指揮者達は、自國民の反對意見も他國の攻撃も、同様に輿論の一部として考慮するの襟度がある。之れ大國の襟度と云はんよりも、斯く爲さるべからざる程に英國の利害關係は複雑廣汎に亘ると觀られる。

昨年通商問題に對する暴舉を見て、日本の言論界は、一齊に英國の惡口を言つた。之に對して英國は決して水掛論はしない、反つて急に親日論が擡頭して來た。又昨年五月頃英國のアレンビー少將が、蘭印各地の軍事視察中、日本に於ては頻りに英蘭密約説が騒ぎ立てられた。之を觀た同少將は、日本の刺客に附け狙はれてゐると稱し、

視察もそこ／＼にして、セレベスからコロンボまで飛行機で飛び、急ぎロンドンに逃げ歸つたと云ふ噂もある。

要するに英國は、自己の利害に忠實であり、且つ粘り強く之を追求する點に、その對外政策の特色が現はれるが、他國と戰爭することを最も厭がる國である。寧ろ現在に於ては、他國とは戰爭出來ぬ國であると云へよう。恐らく戰爭を避けるためならば如何なる屈辱でも忍ぶであらう。英國の戰爭忌避は人道的見地からではなく、冷靜なる利害の差引計算からである。故に他國間の戰爭、殊に自己の商賣仇土の戰爭は尤も歓迎する處であり、自國の安泰を期する爲めには、積極的に斯かる戰爭を工作することも厭はぬであらう。

日米、日露の國交が兎角面白くないのも、英國の魔手が動いて居るからだと觀る向もある。曾て責任ある英國の大官が、日本に日米戰爭をけし掛けた事實があると云ふ噂もある。

一一 英國の實相とユダヤ民族

英國の實相を究める上に於て、注目し價することは、英國の利害なるものは日本人の觀念から觀たそれとは稍々趣を異にすることである。即ち英國の成員個々の利害の集積が、英國全體としての利害と一致するとは限らない、此の場合英國に於ては必ず前者がその指導原理となることである。換言すれば英國の國家は、國民各自が自由な生活を爲し、自由に金儲けする機關として構成されて居る。即ち國家機關主義の國である。

學者の説によると、獨逸、伊太利はヘーゲルの學說によりて完成された近代國家主義を以て不動の原理とし、國家は道德的理想の實現なりとし、個人最高の義務は國家に忠誠なる一員たるに在りとして居るが、英佛及び米國は純然たる個人主義の國にして、個人の利害に必要な限度に於てのみ、國家存在の必要を認めんとする思想が現

はれて居ると云ふ。

純粹なアングロサクソンが英國の主人であつた時代は『自由な生活』が國家構成の主眼であつた。後世ノルマンの侵入以來アングロサクソンは漸次政治を外來者に譲り田舎又は北米に逃げた形である。純粹なアングロサクソンは、米國に於ても漸次フロリダ邊の閑靜な地方に移り、妨げられざる自由な生活を營まんとする傾きがある。

近代、ユダヤ人が英國に勢力を占むるに至り、英國の國家は金儲けの一機關に過ぎぬとも観ることが出來よう。現在英國の財界首腦部は勿論官界に於ても、マクドナルド首相サイモン外相を始めとし要所々々はユダヤ人で固められて居る。英國の三井三菱たるロスチャイルド家は純粹なユダヤ人である。ユダヤ人は宗教を通じて極めて固い秘密の盟約があり、神の選民として世界を支配することが彼等究局の理想であると云ふ。國際聯盟の主腦役員は大半ユダヤ人で組織され、歐洲諸國は獨逸と伊太利を除いて殆んどユダヤ人の天下だと云はれて居る。

他民族と結婚せず、三千年來純血を保つて來たユダヤ人の世界中の總數は、一千五百萬餘、又その傳統と血統を受けたユダヤ系は約六千萬と稱せらる。此の大民族が、國籍は各々その居住地國に屬すと雖も、世界各地に散在して、密に世界の統一支配を目論見、着々工作を進めて居るとするならば、日本はその必然的な國際的膨脹に鑑み列國の國防計畫以上に、ユダヤ民族の動向を重大視す可きものではあるまいか。

ローデン氏（世界の問題）の述べる處によると

『西洋の諸國民中ユダヤ民族程、古來から純血を保つて來たものはなく、又彼等程民族意識に燃え、一貫して独自の宗教と傳統を重んずる民族は世界中に二つとなす。（彼は東洋に日本民族在るを忘れたらしむ）』

と云ふ。又多年ユダヤ民族研究に専念された安江中佐（猶太の人々）の説によると、『ユダヤ民族は表面國籍を別にし、國語を異にするも、居常列國の背景として、經濟に外交に又國際政治に絶大なる役割を演じ、熱烈なる民族意識と、鞏固なる團結

力を以て、國境を超越して隱然たる一大民族國家を成して居る。彼等は國土こそないが、神の選民として、世界の最高民族たるの誇りを有し、且つ民族愛に燃えて居る。彼等はその武器として、意識的に金力と言論機關を掌握して居る』

と云ふ。筆者は最近屢々山岡光太郎氏に、親しくその體驗談を聽く機會を得た。同氏は人も知る如く、私財を蕩盡して三十年間世界各地を踏破し、世界の被壓迫民族の研究に一身を捧げた志士である。著書としては、天覽を賜はりたる『アラビヤ縦横記』、『亞細亞の二大運動、回教徒とユダヤ人』及び『外遊秘話』其の他數冊の著述がある。多年の體驗による同氏のユダヤ民族の研究によれば

『ユダヤ民族は、右の片手では資本主義的金融資本により、世界の強國を機關として、各民族の首玉を握つて居る。同時に左の片手では、社會主義的國際水平運動又は共產主義思想により、その手足をもぎ取らうとして居る。即ち左右孰れかの手によつて世界の民族を桎梏する。日本は結局、英米佛の金庫に入れてあるユダヤ人の

金を使つて、極東からゴビの沙漠を横斷して、世界の心臟たる中央アジアに至る大アジア鐵道でも作る事が、實際的にアジアを開發解放し、世界の繁榮を齎す所以であらう……』
と云ふのである。

ローデン氏によれば、ユダヤ民族は、神の選民たるの自覺に生き當初彼等選民に下されたるエホバの神託豫言、即ち

『神は汝等の世襲財産として、非ユダヤ他民族と所有し得る丈けの地球上の土地とを與へる、汝等は鐵の棒を以て他民族を強制支配し又土器を割るが如く彼等を粉碎することが出来るだらう』

を數千年來不動の信念を以て奉持し此の約束の果される日の來るを期待して居る。又ユダヤの神は殘忍にして復讐の念が強い。ユダヤ人の生活の指導原理は復讐主義であると述べて居る。

一二二 ユダヤの民族精神とその計畫

前述の如く、ユダヤ民族は、意識的計畫的に、歐米の列強を踏臺として、世界民族の支配を念とし、秘密裡にその工作を進めつゝあるや否やは別として、之を一面より考察すれば、彼等は三千年前その國土パレスタインを追はれて以來、他國を流浪して迫害を受けたる結果、既成權力に對して敵愾心を持ち、黄金の力により之に對抗しやうとした。従つて金儲けと守錢に精進し、高利貸の如き習性を持つに至つたものであらう。彼等の此の習性は、更に到る處に於て反感を招き、屢々非道なる迫害を受けた。之に復讐せんが爲めに、益々彼等の守錢奴的傳統は強化されたものであらう。

英國がナポレオンを破ることが出來たのも、ユダヤ人ロスチャイルドの財的貢獻による處が多い。日露戦争の際、英米兩國のユダヤ人財閥が、日本に金を貸して呉れなかつたならば、戦争の結末は、どうなつて居たか解らぬ。

ユダヤ民族は、僅に其の金力によりて、列國興亡の鍵までも握るに至つたが、彼等には國旗がない爲めと、其の守錢奴的習性の爲めに、世界到る處に於て、社會的に冷遇排斥せられる。之に對する復讐手段として擇ばれたるものは、既存の國家社會組織を破壊せんとする社會主義的國際水平運動であらう。ロシア共產革命に於ては、トロツキー、レーニンを初めとして、その首腦者は殆んど悉くユダヤ人である。又五十年前にその指導原理を説いたカール・マルクスもユダヤ人である。彼の學説はヘーゲルの唯心論とフォイエルバッハの唯物論とを折衷した形ではあるが、演繹的に唯物史觀辯證法の確立に努め、社會變革の必然性を説いた點は、一面より觀れば、彼はユダヤ人である爲めに、無意識の間に、彼等の既存社會組織に對する復讐手段を、理論付けんとしたものであるまいかと云ふ疑も起さる。更にレーニンに至りては、唯心論を斥けて専ら唯物論に據らんとした。彼程の學者が、宇宙萬象千古の原理たる『物心一如』の眞理を否定する筈がない。或は彼は、ユダヤ人の復讐の血に燃え、主觀的觀念

的理論に走るを自ら制せんとし、強いて客觀的論證に據らんとしたる結果、極端な唯物論に傾いたものではあるまいか。

安江氏（猶太の人々）曰く

「富裕ユダヤ人と貧困ユダヤ人との間には、方法も自ら差異ある。即ち前者は政治に向ひ、後者は國民に向ふ。併しながら兩者共其手段は、同一の目的に集中されて居る。即ちユダヤ人の權勢を得やうと云ふ意志の達成である……。革命は權勢を得んとするユダヤ人の意志の表現なり。……プロレタリア獨裁も結局はユダヤ人獨裁を意味する」

近代に於ける世界何處の革命乃至戰爭に於ても、ユダヤ人がその影武者でないものはないと云はれて居る。歐洲大戰の如きも、交戦各國は人形芝居の人形の如きもので裏ではユダヤ人が糸を引いたと云ふ觀方もある。何れにせよ、歐洲大戰を契機としてユダヤ人が左右兩面より即ち資本主義的にも社會主義的にも、又は經濟的にも思想的

にも、世界民族に對する支配力を、斷然擴大したことは争はれぬ事實であらう。

民族の闘争に三つの様式あり、それが武力戦、經濟戦、思想戦ならば、ユダヤ民族は、經濟及び思想の戦に於て、必勝の鍵を握るとも云へよう。ユダヤ民族は、人類の頭であり、他の非ユダヤ民族は手足であると云ふ。又彼等は肉體に宿る精神の如きものにして、自餘の民族は肉體に過ぎぬと云ふ。斯くの如く、ユダヤ民族は、神の特製による特別優秀な民族なりや否やは姑く措き、彼等は三千年來祖國なきため、到る處に於て繼子扱ひにされ、他民族より侮辱虐待された關係上、彼等は常に、民族に差別待遇なき世界の出現を希求し、それが彼等の牢固たる潜在意識となつたらう。彼等は金力によりて、人の首玉を締めんとするものも、又虚無又は共產主義によりて、既存組織を破壊せんとするものも、自ら意識すると否とは別として、要は前述の平等を希求する心の發露であり、それを實現する爲め的手段であらう。萬象は『平衡』を目指して進化するものならばユダヤ民族は之を遂行せんとする使徒であらう。

斯ふ考ふる時に、英米佛に宿るユダヤ人の資本主義的勢力とソヴェエト聯邦を機關とする共產主義的勢力との間には、一脈通ずるものあるやに思はれる。是等兩極の作用によりて結果されるものは、ユダヤ人心裡の希求たる民族の差別撤廢であらう。即ち民族自決主義の實現であらう。

一九一八年十二月、フイラデルヒヤに開かれたるユダヤ民族會議の論議に曰く
『過去十九世紀間吾々ユダヤ民族は神がアブラハムに約束した如く、世界を支配す可く奮闘して來た。昔時キリスト教國は吾々を征服した。従つて吾々は全世界に支離分散す可く餘儀なくされた。然れども此の分散は神が我民族に世界制覇の力を養はしめる爲めの所作であつた。今や吾等は、世界がその前に平伏する黄金を完全に手中に納めた。キリスト教國の文化は、吾々を差別待遇するが、それは反つて吾々の計畫を完成することを助成するであらう。……吾々ユダヤ人は、如何なる國に在留しても、その國の組織又は權力に心から承服してはならぬ。その土着民族は、吾

吾に對し義務こそあれ權力はない。凡ての權力はユダヤ民族に屬する。吾々はユダヤ民族以外の如何なる國民にも義務を負ふものでない。……然れども畢竟ユダヤ民族精神の眞髓は神の使徒としての愛地であり愛地主義による世界の開闢である』
或る研究家の説によると、我が大和民族は、數千年前パレスティンを東方に去つたユダヤ民族の正系後裔であると云ふ。斯かる傳説ありとせば、それは吾が民族精神は偶々ユダヤ民族の理想とするものであつた爲めではあるまいか。

一三 自重すべき日本の立場

英國は、資本主義的ユダヤ人の安住の地であり、その國家機構は彼等の機關であるとするれば、東洋に於ける英國既存勢力を狭んでの日英の對立關係には、頗る單純ならざるものがあると思はれる。殊に東洋各地に在留する英人と稱するもの、大部分は、ユダヤ系である事實を想はゞ、一層その關係は微妙であると云へよう。筆者は之によ

りユダヤ系英人は、英本國に二心ありと云はんとするものではないが、彼等が、英國に忠誠なるは、英國々家より恩惠を受くる間にのみ限られ、彼等最終の目標は他にありたらうと云ふことである。又ユダヤ系に非ざる英國人も、經濟的政治的連鎖によりユダヤ人思想に感化される處少くないだらう。

歐洲大戰後に於ける英國の疲弊を觀て、直ちに『大英帝國日既に没す』と見くびるは早計であらう。曾てナポレオンは、英國の鈍重を侮りて、ウォータローの一戦に美事に惨敗したカイゼルも亦、英國の實勢を侮つて、歐洲大戰を惹き起し、自ら没落の悲運を招いた。歐洲大戰當時、英國は合計八百六十萬餘の兵員を動員することが出来た。日露戰爭當時の日本の動員兵數の十何倍かに當る。流石に大國の力量を失はない。然れども之を觀て、英國には測り知る可からざる底力あるかの如く恐れるのも之を侮ると同様に危険であらう。

英國は日本を假想敵としては、甚だしく恐れをなすであらう。それが日本の軍備や

國民性を怖れてだと思ふのは、餘りに淺見過ぎよう。英國は尙歐米白人國全部を糾合して、日本に當り得る勢力はある。日本の軍艦をさう恐れる道理がない。唯恐れるのは、その場合に於ける印度の向背である。又それが極東及びアフリカに及ぼす影響である。此の意味に於て、日本は英國に取り、世界中尤も苦手な國であらう。同時に日本が英國に對しては、亞細亞の民族意識は何よりも強き武器である。日本は若し英國との盟約を復活し、又印度の番犬になるが如きことありとせば、そは自ら武器を捨て英國の軍門に降ると同事である。

日本の既成識者には恐英病者が多い。又小利口に英國を利用せんとする者もある。共に前述の危険に陥る虞れがある。

ナポレオンやカイゼルが、英國に敗れたのは、騎虎の勢にかられて、自ら無理をした爲めであらう。

「獨逸が若しもう六、七年歐洲戰爭を惹き起さなかつたならば、其の間に、英國は

經濟的に獨逸の爲め完全にノックアウトされ、それに従ひ極東並に印度蘭印にも政治的變遷起り、獨逸は勞せずして、英國に代り、世界の覇者になり得たであらう』と云ふことは、歐洲開戦當初、頻りに米國邊で評判されたことである。その豫想の當否は別として、今や日本は戦前の獨逸同様、到る處に於て英國と經濟抗爭を始めて居る。少くも亞細亞に於ける日英の經濟的對立は、正に『喰ふか喰はれるか』の關係にある。此秋に當り、往年の英獨關係を身にしみて顧ることも無駄ではなからう。日本の英國に處する對策は、簡單明瞭であらう。曰く無爲無策、唯大勢の推移に任すのみで足る。英國の工業生産コストは日本の三倍、印度の十倍より安くない。之にて事態變遷の基礎構造は完全に出來て居ると云へよう。

金本位制は白人先進國の搾取機構の一つに過ぎなかつたと観ることが出来る。彼等が、金の蓄積が、國民經濟に有害なる毒物なるを自覺して、之を捨て始める迄には、相當の時間があるであらう。其の間日本は爲替關係の不利を蒙らぬ丈けの外債があ

る。此處にも『貧者必勝の原理』が作用する。

是を要するに、日印間の經濟關係は、共存共榮の常道を辿つて益々深められ、印度自體の工業化と共に、英國の産業を愈々危地に導くであらう。従つて英國に於ける失業群は漸増の一途を辿り、社會不安は遂に危険圏内に進み入るであらう。之は日本の責でも、印度の罪でもない。亞細亞民族と貧富の差を附けた英人自身の罪である。即ち英國自身が、富に食傷した症狀、換言すれば老境に入つた現象に外ならない。最近英國政界の不安が頻りに報ぜられる。原因は勞働問題だと云ふ。

大勢を観るに敏なる英人、即ち多分にユダヤ民族の觀念に支配される彼等は『大勢への反抗は商賣には禁物なり』と考へるであらう。株の相場ならば『英國』を賣つて『印度』を買ふ手口に替るであらう。従つて彼等は自己の利益の爲めに、英本國が印度を搾取することに反對する。印度に於ては、搾取なき英國の統治は有り得ない。必ず早晚然る可き政治的變遷を経て、印度は印度人の意思と利害を基礎とする國となる

であらうと信ずる。

英國の大御所たるカンタベリー僧正は、最近ロンドン・タイムスに書を寄せて「印度人の自由意思を尊重することは、印度統治の根本原則なり」と仰せ出された。同僧正の意見は、英國の實際政治を超越したものであるかも知れぬ。然し之を以て、英國に於ける印度問題に對する潜在潮流の一斑を窺へよう。

前に述べたるが如く、日英の經濟的對立は、此儘で押進めば何等かの政治的理由を裝ひ武力の衝突にまで發展する必然性がある。之を避くる途は、印度の解放、亞細亞搾取民族の解放以外に方法がないと思はれる。同時に頭數の多い被搾取民族の解放はその生活向上と共に、世界の消費總和を著しく増大する。世界不況の根本匡治策も是れ以外に道なきことは明白である。即ち民族の共存共榮を計る事に於てのみ、世界の繁榮は期せられるであらう。

此の不動の眞理は、極めて近き將來に於て、英國をして自發的に、その東洋政策の

一大轉換をなさしむるものであり、又なさしむ可くつとめねばならぬものであると信ずる。

昭和十年九月十二日印刷
昭和十年九月十七日發行

『金銀の將來と我對外政策』
定價一圓二十錢

著者 立野斗南

東京市麹町區內幸町一丁目三番地
大阪ビル五五六―七號

版權
所有

發行者 豐島 振

東京市牛込區神樂町一丁目二番地

印刷所 硯究社印刷所

東京市麹町區內幸町一丁目三番地
大阪ビル五五六―七號

發行所 日本外事協會

印刷者 小瀬井吉藏

687
93

